國學院大學学術情報リポジトリ

日蓮真蹟遺文における表記：「ん」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀川, 宗一郎, Horikawa, Soichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000069

日蓮真蹟遺文における表記
—「ん」を中心に—

堀川宗一郎

一、はじめに

日蓮の平仮名消息には、次のような「ん」の表記がみられる。

1　外典三千余巻にも忠孝の二字こそせん［詮］にて候なれ。

2　権教の論師の流を受たる末、論師なんどは、後生しりがたき事なるべし。

3　人〳〵さもやとをぼしめしたらん時申べし。

4　これをもんて［以て］惟察あるべし。

5　人に尊卑上下はありというとん［とも］、親を孝するにはすぎずと定られたるか。

6　当世は諸宗の行多けれどん［ども］、時にあたりて念仏をもてなして、

（法門可被申様之事）

用例1は漢字「詮」の平仮名表記であり、用例2は撥音、用例3は推量の助動詞ム、用例4は促音、用例5・6は接続助詞

トモ・ドモを表している。これらの例から「ん」は、撥音・「む」・促音・「も」の表記にあてられているようにみえる。

このうち、用例5・6の接続助詞「とん・どん」の「ん」については、「も」の平仮名ではなく撥音を表したものであり、「トモ・ドモ」から変化した「トン・ドン」という当時の口語[1]を示していると考えられている（春日正三（一九七九）・古瀬順一（一九九一））。更には、それを東国方言に限定する立場（岡崎正継（一九七九））もある。

しかし、これらが表記された通りに発音して、接続助詞トン・ドンという語が存在していたとする点については、再考の余地があると考える。本稿では、日蓮の平仮名消息における「ん」の使用実態を明らかにした上で、「とん・どん」の表記が何を示すのかを明らかにし、当時の書記実態の一端を考察する。

調査は、神保弁静編『日蓮聖人御真蹟』所収の平仮名消息と、山川智応編『日蓮聖人御真蹟大集』所収の平仮名消息を対象とした。用例の清濁・句読点等は私に施した。なお、平仮名消息の中には、一つの消息内に片仮名で書かれた部分と平仮名で書かれた部分が併存しているものがある。それについては別に扱う。

二、日蓮真蹟遺文における調査結果

二―一、漢字音におけるn韻尾・m韻尾の表記

漢語の表記に「ん」が見られるものとして、次のような例がある。

［「ん」の表記の例］

7　大蛇が珠を含、いらん［伊蘭］よりせんだん［栴檀］を生ずるがごとし。　（法衣書）

また、「む」の表記も見られる。

［「む」の表記の例］

8　……引合て御らむ［覧］ありしかば、……　（撰時抄）

以上のような漢語の表記に「ん」と「む」の両表記が見られるということは、n韻尾とm韻尾の違いを反映した可能性がある。佐々木勇（二〇一〇）では、親鸞の『尊号真像銘文（略本）』において、n韻尾は「ン」、m韻尾は「ム」で表記が統一

されていると述べている。この資料は訓点資料ではあるが、日蓮と同時代の人物であることから、日蓮もn韻尾とm韻尾を区別していた可能性が考えられるのである。そこで、日蓮にn韻尾とm韻尾を書き分ける意識が存在していたのかどうかを調査した。熟字における漢字韻尾は、後続の漢字による影響が起きやすいことから、単漢字のみを対象とした。使われたすべての単漢字をn韻尾とm韻尾に分けたものが表1である。

【表1】

n韻尾	m韻尾
論・損・難・散・現・善・前・詮	覧・感・減

日蓮がn韻尾とm韻尾を書き分けているのであれば、n韻尾である「論」「損」などは「ん」で表記され、m韻尾である「覧」「感」「減」は「む」の表記で統一されることが予想される。その結果をまとめたものが表2である。

【表2】

n韻尾	
む表記	ん表記
論	
1	0
損	
3	3
難	
0	2
散	
0	8
現	
0	3
善	
0	2
前	
0	23
詮	
0	6

m韻尾	
む表記	ん表記
覧	
8	3
感	
0	1
減	
0	1

表2のように結果は、n韻尾の「論」「損」を「む」、m韻尾の「覧」「感」「減」を「ん」で表記した例があった。

9　いきて候し時よりもなをいろしろく、かたちもそむ［損］せずと云云。　（妙法尼御前御返事）

10　修羅道をかん［感］ぜり。　（兄弟抄）

どのような理由によって二種の仮名を用いているのかについては三―一の考察に譲り、ここでは漢字音の表記における「ん」と「む」が、n韻尾とm韻尾を区別する意識によって書き分けた表記の違いではないことを押さえておきたい。

二―二、和語における撥音表記

漢字の撥音の箇所が「む」で表記されることは稀であったが、和語の場合はどうであろうか。和語における撥音の表記が見られる語の中で、総用例数（ん表記＋む表記）が二例以上あるものは、ナド・イカガ・ナゾ・ハベリの四語である。その表記をまとめたものが次の表3である。[2] 撥音は「ん」で表記することが大勢で、「む」で表記する例は見られない。

【表3】

む表記	ん表記
なむど	なんど
0	47
いかむが	いかんが
0	31
なむぞ	なんぞ
0	2
はむべり	はんべり
0	9

11　爪の上の土なんどゝとかれて候。（法門可被申様之事）
12　十が八九はいかんがとみへ候。（太田金吾殿御返事）
13　過去の罪の滅かとみへはんべり。（転重軽受法門）

したがって、和語の場合、原則として撥音は「ん」で表記していることがわかる。なお、表3に挙げた語の中で撥音を無表記にした例はイカガの一例が見られるのみであった。[3]

二―三、推量の助動詞

次に推量の助動詞のム・ムズ・ラム・ケムには用例14・15のような「む」で表記されたものと、用例16～18のような「ん」で表記されたものとが見られる。

［「む」で表記された例］

14　うつり付ざらむ人〳〵不孝の失疑なかるべし。（法門可被申様之事）
15　いたづらに、やくびやうにやをかされ候はんずらむ。（御文給候御書）

［「ん」で表記された例］

16　又切ずは日蓮道理とこそ人〳〵はをもひ候はんずら

め。　（十章鈔）

17　いかにかなしかるらんかとなげかんほどに、　（尼殿御書）

18　たれにいゐあづけてか、冥途にをもむき給けん。　（妙一尼御前御返事）

そこで、推量の助動詞を「ん」「む」のどちらで表記しているか、用例数をまとめると表4のようになる。

【表4】

む表記	ん表記
む	ん
25	260
むず	んず
0	17
らむ	らん
25	27
けむ	けん
0	20

これによれば、推量の助動詞は「ん」で表記することが原則であると捉えることができよう。「む」で表記する例があるのはムとラムだけである。これは、ム・ムズ・ラム・ケムの「む」が、日蓮の頃には撥音になっていたことを示すものと考えられる。[4] ここでも「ん」は撥音を表した平仮名として用いているのである。

なお、ムとラムに見られる「む」の表記については、三―二で改めて考察する。

二―四、促音表記

ここまで、「ん」が撥音を表した平仮名であることを確認してきたが、日蓮の平仮名消息には用例4の「もんて」のように促音の箇所に「ん」が用いられているものが存在する。そこで促音の表記を調査したところ、「ん」によるものの他に無表記と「つ」によるものの例も見られた。

［促音「ん」表記の例］

19　羅什智をもんて［以て］知候べし。　（即身成仏抄）

20　あに［兄］位に即給ずといんて［言て］死せ給にき。　（兄弟抄）

［促音無表記の例］

21　人畜の形をかえけれどん、風雲にのて［乗て］仙宮にはあそばざりけり。　（兄弟抄）

22　印真言をもて［以て］佛を供養せしよりこのかた利生もかた〳〵失たるなり。（撰時抄）

［促音「つ」表記の例］

23　ゆり［許］じなんどをもつて［以て］候へば、（兄弟抄）

そして、促音の箇所における「ん」・無表記・「つ」の例のうち、総用例数が二例以上あるもののそれぞれの用例数をまとめたのが表5である。

【表5】

つ表記	無表記	ん表記
もつて	もて	もんて
1	12	61
よつて	よて	よんて
0	8	1
あつて	あて	あんて
0	1	1

日蓮の促音の箇所における表記は「ん」が多く、無表記がそれに次いでおり、これによって「ん」は促音を表した平仮名としても使われていたことがわかる。

撥音と促音とが同じ仮名で表記されることについては、訓点資料では撥音（n撥音）と促音の表記は、無表記や「ム」「ン」といった同じ形で表記していたとされ、「ツ」で表記するのは時代が下ってからであると言われている（築島裕（一九六九））。肥爪周二（二〇〇三・二〇〇八）は、前後を他の音で挟んだ形でしか発音できない促音と、濁音・ナ行・マ行音といった鼻音性を有した音の前にしか立たない撥音とは、完全な相補分布をなしていたことから、表記の上で区別が必要なかったと述べている。このことからも、「ん」を撥音の箇所や促音の箇所に使用するのは問題がなく、表5の「ん」は、訓点資料における表記と同様に、促音を表記したものであると言える。

ただし、日蓮の平仮名消息に「つ」で表した例があることを踏まえると、当時促音は音韻として確立しつつあったと考えられるが、「ん」や無表記で表す前時代の書記方法を踏襲していると言うことができる。

これまで見てきた二―一～二―四の事象をまとめると、日蓮の平仮名消息における「ん」は、撥音と促音とを表した文字で

あることが確認できた。これを踏まえて「とん・どん」の表記について考察する。

二―五、「とん・どん」の「ん」

前にも述べたように先行研究では、接続助詞トモ・ドモの「も」の箇所に用いられている「ん」は撥音を表したもので、トン・ドンという語が存在していたとしている。そこで、接続助詞「とん・どん」「とも・ども」それぞれの表記を調査したところ、表6のようになった。

【表6】

も表記	ん表記
とも	とん
0	120
ども	どん
1	248

この表からも明らかなように、接続助詞トモ・ドモは用例24・25のような「ん」で表記された「とん・どん」という形にほぼ統一されており、「も」で表記された例は、用例26の一例のみである。

［接続助詞「とん・どん」の例］

24　設法花経をもんて行とん験なし。　（治病抄）

25　音をあげてよめどん彼の経文のごとくふれまう事が、（転重軽受法門）

［接続助詞「ども」の例（「とも」の例はなし）］

26　辟へば春の菜は秋菜とならず。設なれども春夏のごとくならず。　（治病抄）

この結果と、先に確認した、日蓮が「ん」の文字を撥音に用いていたこととを踏まえると、一見、接続助詞「とん・どん」の「も」の箇所に用いられている「ん」は撥音を表したもので、トン・ドンという語が存在していたとする先行研究の説は妥当のように思われる。しかし、日蓮が消息において片仮名で書いた箇所を見ると、平仮名の場合とは表記の仕方が異なり、問題が残る。次に片仮名表記の例を検討していく。

二―六、日蓮における片仮名表記

「薬王品得意抄」は、本稿の調査範囲において、片仮名で書かれた箇所と平仮名で書かれた箇所の両表記が併存する唯一の消息である。その中で、片仮名で書かれた箇所における撥音と接続助詞トモ・ドモが、どのように表記されているかを見ていくことにする。

漢語を片仮名書きにした例は見られないので、和語における撥音の表記を見ると、次のようなナドの例のみが見られる。

27　カタマシキ者ナムドハ行歩（スト）イヘドモ老骨者女人

ナムドハ行歩（ニ）不叶。

28　老骨ナムドモ或（ハ）遊宴（ノ）ため、

29　例（セバ）世間（ノ）小船等（ガ）自（リ）筑紫 至（リ）坂東（ニ）、鎌倉（ヨリ）イノ嶋［江ノ島］ナムドヘトツケドモ唐土（ヘ）不至。

平仮名で書かれている箇所では「なんど」という表記に統一されていたが、右の例のように、片仮名で書かれた箇所では「ナムド」となっている。築島裕（一九六九）によれば、訓点資料において、撥音の箇所に「ン」が用いられるようになったのが十一世紀以降とあり、それまでは無表記か「ム」で表されていたとされる。つまり、日蓮の消息中に片仮名「ン」が用いられている箇所が一例もないことから、日蓮は、片仮名で書く箇所においては撥音を片仮名「ム」で表記するという前時代の書記方法を踏襲していたと考えられる。では、接続助詞トモ・ドモはどうであろうか。

平仮名で書かれた箇所では「とん・どん」に表記がほぼ統一されていたが、片仮名で書かれた箇所では次の例のように「トモ・ドモ」の表記に統一されており、「トム・ドム」という表記は見られなかった。

27　カタマシキ者ナムドハ行歩（スト）イヘドモ老骨者女人

ナムドハ行歩（ニ）不叶。

29　例（セバ）世間（ノ）小船等（ガ）自（リ）筑紫 至（リ）坂東（ニ）、鎌倉（ヨリ）イノ嶋［江ノ島］ナムドヘトツケドモ唐土（ヘ）不至。

平仮名で書かれた箇所では、「とん・どん」と表記はほぼ統一されていたが、片仮名で書かれた箇所は「トモ・ドモ」に統一されており、「トム・ドム」という表記は見られなかった。

これらの片仮名で書かれた箇所の後に、平仮名書きの用例30が見られる。

30　許やうなれどん、二乗・悪人・女人なんどの得道は、

同一文献内に併存する片仮名表記「トモ・ドモ」と平仮名表記「とん・どん」が異なるものを表しているとは考えにくい。片仮名「ム」が撥音の箇所のみに見られること、そして片仮名表記の「トム・ドム」が見られず、同一文献内に平仮名表記「とん・どん」と片仮名表記「トモ・ドモ」が併存していることから、「とん・どん」の「ん」は撥音を表したものではなく、「も」の平仮名として用いているものと考えられる。したがって、日蓮の平仮名消息において、トン・ドンという語は存在しなかったと考える。(5)

三、固定化した連綿表記

三―一、接続助詞以外の「とん・どん」

右に見たように、接続助詞「とん・どん」の「ん」は、撥音を表したものでなく、「も」の平仮名として用いていると考えられる。実は、日蓮の平仮名消息には、接続助詞トモ・ドモ以外に「も」が「ん」で表記されている例が見られるのである。

31　天台宗日本になかりし時は謗法とんしられざりしが、（法門可被申様之事）

32　百千万億倍たへがたき事どん、いで来るべし。（尼殿御書）

33　舎利弗ととんに釈迦仏にまいりて、（盂蘭盆御書）

用例31は係助詞モであり、用例32は接尾辞ドモ、用例33は名詞トモ（共）の例である。ここで注目されるのは、いずれも「と」に続いた「とん」という場合にのみ見られるということである。しかし、接続助詞トモ・ドモの場合とは異なり、「とも」の表記も見られ、表記は統一されていない。右のような例の中で総用例数が二例以上のものをまとめたものが表7である。

【表7】

	ん表記	も表記
格助詞＋係助詞	と―ん	と―も
	13	4
接尾辞	どん（共）	ども（共）
	24	2
名詞＋格助詞	とん（共）に	とも（共）に
	1	5
副助詞の一部＋係助詞	なんどん	なんども
	2	2

なぜ、「も」の箇所に「ん」が用いられるのが、いずれも「と」に続いた「とん」という場合のみであるのだろうか。

そこで、日蓮以前の表記に目を向けて平安時代における平仮名消息資料[6]を調査したところ、次のように「も」を「ん」で表記した例が見られた。

34　かくかならずなほ□[と]おんひ［思ひ］たまふるこゝろにてなむ　（虚空蔵菩薩念誦次第紙背文書二種乙）

35　われはいかにん［いかにも］しらぬ□[に]　（藤原為房妻書状（22））

36　これらは、いづくん［いづくも］〳〵よしみちのおさなかりしに、……人どん［共］のありしかば、……まつどのゝこどん達［こども達］……など、いふ事ありとん［とも］、もちゐらるまじ。　（皇嘉門院御処分状）

37　なにごとん［なにごとも］、又〳〵申候べし。　（藤原盛方書状）

用例34～36には、日蓮とは異なり、「と」を上接しない「も」の箇所にも「ん」の表記が見られる。その一方で、用例36・37では日蓮と同様に「とん」という連綿表記も見られる。

このように平安時代には、「も」の仮名として「ん」が用いられていた。では、いつの頃から使われなくなるのだろうか。そこで注目されるのは、青谿書屋本『土左日記』である。

38　をとこんすなる日記といふものををむなんしてみんとするなり。　（十二月廿一日）

青谿書屋本『土左日記』は、貫之自筆のものと字母・字体・書体が同じものと考えられ、用例38の傍書「毛」は、為家書写

以前に補記されたものとされている（池田亀鑑（一九四一））。つまり、貫之の時代には平仮名「も」を「ん」で表記していることが知られるのである。ここで「ん」の傍書に「毛」とあるところに注目すると、鎌倉時代前後には、平仮名「も」の箇所に「ん」を使用することは一般的ではなかったことが想像されるのである。しかし、そのような状況のなかで「とん」という表記は鎌倉時代の遺文や『教訓抄』『愚管抄』『梁塵秘抄』にも見られる（林和比古（一九三七））ことから、「とん」という固定的な文字連鎖による表記として残ったと考えられるのではないだろうか。

「とん」が固定的な文字連鎖による表記であることは、接続助詞において一例だけ「ども」と表記された用例26からも説明することができる。「とん」と表記された箇所において「と」と「ん」が一続きに書かれていないものはない。しかし、「ども」と表記された用例26は、紙面が足りなくなったため、無理に書き込んだ例であり、「ど」と「も」が離れて書かれている。

26　……設なれど
　　も

つまり、「とん」という固定的な文字連鎖による表記は、「固定化した連綿表記」であると言い換えることができる。そして、一続きに書くことができない用例26においては「ども」と書いたのである。日蓮の平仮名消息においてトン・ドンという接続助詞は存在しなかったと、この点からも言うことができるのである。

以上のことから、「とん」という文字連鎖は「固定化した連綿表記」であり、「とん」のような「と」に続く場合に限って「も」を「ん」で書記する前時代の書記方法が踏襲されたと考える。日蓮の表記には、二―四で述べたように促音の表記に「ん」を用いたり、二―六で述べたように片仮名の撥音に「ム」を用いるといった点においても前時代の書記方法を踏襲しており、同じ傾向が見られるのである。

また、「固定化した連綿表記」に使われる平仮名字母には、前時代において「も」の音韻に対応した「ん」という異体字としての用法ではなく、既に音韻との対応関係が失われ、「とん」という文字連鎖に「固定化した連綿表記」として残った、形骸化した異体字が使用されている。

三―二 表語機能と境界表示

「とん」という文字連鎖が前時代の「固定化した連綿表記」を踏襲したものであることは明らかとなったと思われるが、本稿の言う「固定化した連綿表記」は、「連綿」より狭い意味で用いる。ここで「固定化した連綿表記」と「連綿」の相違点について説明したい。「連綿」は文字の連続を一続きに書くことを指し、使用字母と墨継ぎの位置は―表語性を持つ場合も当然あるだろうが―書記者の恣意に任されている。[7] それに対して、「固定化した連綿表記」は特定の文字連続を書記する場合に、使用する字母が決まって一続きに書かれることを指す。つまり、「連綿」のうち、固定的な書き方を指す。

従来、一続きに書かれることが固定的な場合や「ん」という文字は、表記論の観点から「表語機能」（小松英雄（一九九八）ほか）があるとされたり、「ん」の文字は文節末の「境界表示」（中川美和（一九九四・二〇〇二a・二〇〇二b））を果たすとされたりして、意味的・機能的な働きがあるとすることが多い。

それでは、「固定化した連綿表記」である「とん」は「表語機能」や文節末の「境界表示」といった機能を備えているのだろうか。接続助詞トモ・ドモにおいては、使用字母が固定され、墨継ぎの位置が語と対応していることから、「表語機能」や文節末の「境界表示」といった機能を備えていると言える。しかし、それ以外の「とん」という文字連鎖ではどうであろうか。

まず、「表語機能」の有無について見る。例えば用例39は「仲人も」の例、用例40は「なんども」の例であり、「とん」という一語では捉えられず、「表語機能」があるとは言えない。

39　但、なかうどん［仲人＋も］なくひらなさけに、又心もなくうちたのませ給。　（可延定業書）

40　其の外仏陀密多龍樹菩薩なんどん［なんど＋も］多の難にあへり。　（転重軽受法門）

次に、文節末の「境界表示」の機能の有無について見ると、先掲の用例33のように「境界表示」を示していない例もある。次に再掲する。

33　舎利弗ととんに［共に］釈迦仏にまいりて、　（盂蘭盆御書）

このように「固定化した連綿表記」は「表語機能」や語の「境界表示」を示すためだけにあるのではないのである。

日蓮の平仮名消息における「固定化した連綿表記」は、「とん」の他にもう一例指摘することができる。二―三の表4の推量の助動詞においては「ん」の表記が大勢であったが、それは、ムとラムに限って「む」の表記が見られるのであった。特に、助動詞ラムに「む」の表記の多いことが注目される。そこで、助動詞ムにおいて「む」で表記された二十五例を見ると、「む」の上接文字に偏りがあることがわかるのである。それをまとめると表8のようになる。

【表8】

用例数	
24	ら＋む
1	ち＋む

すなわち、二十五例中二十四例が、用例41・42の「ならむ」「ざらむ」のように「ら」を上接している（残りの1例は用例43の「堕ちむ」の例）。

41　已に亡国とならむ［なら＋む］とし候歟。（即身成仏抄）

42　うつり付ざらむ［ざら＋む］人〳〵不孝ノ失疑なかるべし。（法門可被申様之事）

43　日本国の人皆無間大城に堕ちむ事よ。（撰時抄）

推量の助動詞において「む」で表記される箇所は、助動詞ラムと用例41・42のような「らむ」という文字連鎖に見られる。また二―一の表2のように、漢字「覧」の平仮名表記に多く見られたのも、漢字音の問題ではなく、「ら」に続くことによるのであろう。このように、「らむ」は「とん」と同様に「固定化した連綿表記」であると言える。なお、「らむ［覧］」以外の「ろむ［論］」「そむ［損］」そして、用例43の「（堕）ちむ」の場合は、「ら」「ろ」「そ」「ち」の四つの仮名字体の類似していることが「む」への同様な運筆を可能とし、「論」「損」の仮名表記や「（堕）ちむ」にも「む」の表記が見られる結果となったと考える。

そして、「らむ」という「固定化した連綿表記」においても「表語機能」が備わらないことは、用例41・42から明らかである。また、「む」を撥音の表記に用いる場合は、日蓮当時の音韻とは対応しない使い方である。助動詞ム・ラムの表記に関しては、推量の助動詞が撥音化した後も「ら」に続く場合に「む」の表記が残ったことになる。

このような書記方法が他の資料にも見られるのだろうか。そこで、推量の助動詞が撥音に変化した後の仮名消息資料[8]を調査したところ、「藤原為房妻文書」において日蓮と同様の傾向が見られた。

【表9】　藤原為房妻（平安時代後期）

む表記	ん表記
む	ん
15	22
むず	んず
0	0
らむ	らん
1	0
けむ	けん
1	0

助動詞ラムは一例のみであるが、助動詞ムの十五例中十二例が「ら」を上接している。つまり、推量の助動詞における日蓮の書記方法においても前時代からの「固定化した連綿表記」を踏襲した[9]ものであると言えるのである[10]。

以上のように、日蓮の平仮名資料には「固定化した連綿表記」があることを指摘した。そして、「固定化した連綿表記」は「表語機能」や「境界表示」よりも優先されることのあることを示した[11]。

さらに本稿では、「固定化した連綿表記」に使われる字母に着目したい。日蓮の平仮名消息での「ん」は撥音・促音を表す仮名として、「む」はmuの音韻を表す仮名として使うのが原則である。それに対して、「ん」を「も」を表す仮名として表記する場合と、「む」を撥音を表す仮名として表記する場合は、まったく自由に表記できるわけではなく、上接する仮名に支えられてのみ表記可能であった。一つの字母が複数の音韻と対応する事例を分析する際には、意味的・機能的な面からの考察だけではなく、「固定化した連綿表記」という観点も考慮に入れなければならないのである。

日蓮の平仮名消息に見られる表記の方法は、日蓮による創作ではなく、日蓮以前にあった書記方法を踏襲したものである。語の境界と対応していないことや日蓮の時代の音韻と対応した

平仮名字母ではないことは、一見、文の理解に支障がありそうに見えるが、出現位置が決まっていることによって読み手が理解するのに問題はなかったのであろう。

四、おわりに

最後に、本稿で述べたことをまとめる。

1　日蓮の平仮名消息における「ん」は、撥音と促音を表す仮名であり、「と」に続く場合には「も」の仮名として用いられた。

2　促音を「ん」で表したり、「と」に続く「も」を「ん」で表すのは、日蓮以前にあった書記法であり、日蓮は古い書記法を踏襲している。

3　接続助詞トン・ドンは、日蓮の平仮名消息では確認できない。

4　日蓮の平仮名消息では「とん」と「らむ」のような文字連鎖に「固定化した連綿表記」が見られる。

5　「固定化した連綿表記」は、「表語機能」「境界表示」という意味的・機能的な面よりも優先されることがある。

6　「固定化した連綿表記」に用いられる平仮名字母には、当該資料の使い方から見て異例となる字母が選ばれることがある。

本論文では、「ん」の字母が「毛」「无」のどちらであるのかについて記述しなかった。それは、日蓮の遺文において「ん」の字体差による書き分けを認めないことが要因である。[12] それに加えて扱った資料の時代においても、既に「ん」が一般的に使用され、大きな字体差が見られないからである。また書き手が僅かな字体差による書き分けをしていたとしても、機能的な情報伝達が求められる消息において、その書き分けが機能的な役割を果たし、消息の読み手がそれを認知していたとは考えにくいからである。

これまでの研究は、連綿による「表語機能」や語の「境界表示」の有無を中心に、各書記資料を考察してきたように思われる。しかし、連続しやすい字母が「表語機能」や語の「境界表示」よりも優先され、またその字母が音韻と既に対応していない場合においても、「固定化した連綿表記」として書記される点を、これからの平仮名表記研究では考慮に入れて行うべきであると考える。

注

（1）春日正三（一九七九）では現在においても九州方言に見られることを指摘しており、岡崎正継（一九七九）は千葉方言に見られることを指摘している。本稿では日蓮の消息に見られる「とん・どん」の表記がこれらの方言に直接的に関係していると判断できないので、考察の対象にはしない。

（2）表3に挙げた以外のもので撥音の無表記の例は「いま四五日はあるべけに候。（土木殿御返事）」のみであった。

（3）漢語において撥音の無表記の例は「けさん［見参］」のみであった。

（4）一〇〇〇年以降、推量の助動詞ムが撥音になっていることは馬淵和夫（一九七一）でも述べられている。なお、久曽神昇（一九九二・二〇〇〇）所収の仮名消息と、親鸞の妻である恵信尼の消息を調査したところ同様の傾向が見られた。

（5）用例29の「イノ嶋」は「エノ嶋」の訛音であることから、片仮名表記において口語が反映されにくいとは言えないことを示している。

（6）久曽神昇（一九九二・二〇〇〇）所収のものを挙げた。

（7）ただし、小松英雄（一九九八）は、「連綿」を書記者が語を意識して行ない、使用字母や墨継ぎの位置が固定的であることで「表語機能」を持たせる方法の一つと捉える。

（8）久曽神昇（一九九二・二〇〇〇）所収の中で、十通以上現存している人物の消息のみを考察対象とした。

（9）注8における調査範囲で平安時代末期以降の人物の仮名消息は「藤原兼実文書」「大炊御門師経文書」「近衛兼経文書」の三種である。「藤原兼実文書」と「大炊御門師経文書」では、「む」表記に上接する仮名は「ハ」であった。つまり、時代の変遷とともに「む」から「ん」へと表記が変化する一方で、「む」で表記する際は上接する仮名が「ら」から「ハ」へと変化する傾向が見られる。これは、「侍らむ」といった「侍り」文から「候はむ」といった「候ふ」文へと文体が変化したことが要因と考えられる。しかし、日蓮の消息は「候ふ」文であることから、やはり前時代の「侍り」文の「固定化した連綿表記」を踏襲しているといえる。

（10）「藤原為房妻文書」において、「む」を含む漢字音の仮名表記は見られなかった。

（11）白井純（二〇〇八・二〇一一）では、連綿体活字を持たないキリシタン版前期活字本に対して連綿表記を含む写本では、前期活字本の字母を語の境界表示という機能性に合致する字母に変更しているが、字母の連接性が強い文字連鎖の場合には、語の境界表示よりも優先されると述べている。

（12）古瀬順一（一九九一）では、「ん」の字体を細分化したものの、その字体差による機能的な書き分けを指摘することはできないとしている。

【参考文献】

池田亀鑑（一九四一）『古典の批判的処置に関する研究　第一部　土左日記原典の批判的研究』岩波書店
岡崎正継（一九七九）「接続助詞『とん』『どん』について」（『田邊博士古稀記念　国語助詞助動詞論叢』桜楓社）
春日正三（一九七九）「日蓮聖人ご遺文の国語学的研究―音声言語資料としてのトン・ドン―」（『立正大学文学部論叢』六十三号）
樺島忠夫（一九七七）「文字の体系と構造」（『岩波講座　日本語8　文字』岩波書店）
久曽神昇（一九九二）『平安仮名書状集』汲古書院
久曽神昇（一九九二）『平安時代仮名書状の研究　増補改訂版』風間書房
久曽神昇（二〇〇〇）『中古中世平仮名書状集』風間書房
河野六郎（一九七七）「文字の本質」（『岩波講座　日本語8　文字』岩波書店）

古瀬順一（一九九一）「『とん』『どん』の『ん』の読み方」（『中世国語史資料としての「日蓮遺文」の研究』）国書刊行会
小松英雄（一九九八）『日本語書記史原論 補訂版』 笠間書院
佐々木勇（二〇一〇）「親鸞と明恵の漢字音—漢字片仮名交じり文における比較—」（広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第五九号）
白井純（二〇〇八）「キリシタン版の連綿活字について」（『アジア・アフリカ言語文化研究』七十六号）
白井純（二〇一一）「キリシタン版の原語にみる仮名用字法の意識—活字本と写本の比較から—」（『人文科学論集』四十六号）
築島裕（一九六九）『平安時代語新論』東京大学出版会
中川美和（一九九四）「平安時代平仮名文献における『ん』字の表記についての一考察」（『都大論究』三十一号）
中川美和（二〇〇二a）「伝藤原公任筆古今和歌集における『ん』字について」（『人文学報』三三〇号）
中川美和（二〇〇二b）「高野切古今和歌集第二種および同筆資料における『ん』字について」（『日本語の文字・表記—研究会報告論集—』国立国語研究所）
林和比古（一九三七）「助詞ドンについて」（『国語と国文学』第十四巻第九号）
肥爪周二（二〇〇三）「清濁分化と促音・撥音」（『国語学』五十四巻）
肥爪周二（二〇〇八）「撥音史素描」（『訓点語と訓点資料』一二〇巻）
馬淵和夫（一九七一）『国語音韻論』笠間書院